第一回　平成二十一年四月十八日

古墳の出現と社会の変化

森下　章司

今、御紹介いただいたとおり、私の専門は、考古学という学問です。考古学から今回のテーマとなる社会の変化をどのようにとらえるかということに関してお話をさせていただきたいと思います。タイトルは「古墳の出現と社会の変化」としております。

考古学については、皆さん御存じの方も結構多いとは思うんですけれども、遺跡を調査して、そこから歴史を研究するという学問になります。どうやって発掘したものから歴史を組み立てるのかというのは問題で、学生さんが卒論を書くときにも一番にひっかかるところです。いろいろなやり方があるんですね。私は今回のテーマの「変化」は、歴史を研究するときに、一つのポイントになる考えだと思っております。歴史の研究、考古学の研究でも、「変化」という点に目をつけて説明するというのは、大変重要な方法になっています。

考古学で見てゆきましても、この日本列島の歴史の中にはいろいろな変化があります。私たちはその一

番大きな変化のことを、「画期」と呼んでいます。歴史の歩みの中で大きな変化が起こるところ、それを「画期」とし、その「画期」の状況を研究のテーマにするということがよく行われます。

日本列島の歴史、人間が住み始めてからの歴史は、大体今から少なくとも三万年以上前に遡ります。いつから日本列島に人が住んでいたか、非常に難しい問題になってるんですけれども、大陸から渡ってきた人間が住み始めて以降、日本の歴史の中に非常に大きな画期がいくつかあります。

まず「定住の始まり」があげられます。これは縄文時代の始まりにあたります。それまで狩猟中心で、獲物を追う移動生活をおくっていたのが、縄文時代の始まりとともに少し生活が安定して、そして一カ所で長くとどまって生活をするという、定住が始まる、これは最初の大きな画期です。

その次の大きな変化というのは、「農耕社会の成立」であり、弥生時代の始まりですね。稲作文化が大陸から入ってまいりまして、食糧生産の方法、社会の仕組みそのものが決定的な変化をとげました。今まで、私たちも米を食べる生活をおくっているわけですけれども、その基礎がつくられたのが弥生時代です。

その次、きょうのテーマにしております「古墳の出現」というのも、これまた次の大きな変化です。弥生時代から古墳時代への大きな変化、ひょっとするとこの変化というのは、今の日本の社会的基礎を形づくったのかもしれません。三番目の大きな変化として、この「古墳の出現」という変化があげられます。

そこでは「出現」という言葉を使っておるんですけれども、これは「今までなかったことがあらわれて

くる」という意味になります。この古墳の出現というのは、具体的には「前方後円墳の出現」と言いかえることもできます。

前方後円墳は御存じのとおりの形の墳墓です。きょう何度も出てきます有名な古墳、奈良県にあります箸墓古墳をまず例にとりあげます(図一)。後で映像も見ていただこうと思っていますが、この箸墓古墳が、ほとんどの研究者が一致して、一番古い段階の前方後円墳というふうに評価しています。古墳時代の一番最初のところに位置づけられています。それは単に古いというだけではなくて、墳丘の長さが約二百八十メートルの大変大きな古墳なんですね。

ですから、この前方後円墳というのは、前の時代の墳墓がだんだん大きくなってきて、そして古墳時代になってさらに巨大化するという、そういう段階的な変化ではなく、「出現」という言葉を使いましたのはそこに理由があるんですけれども、突然大きなものがどーんと出てくるということになります。その「画期」と

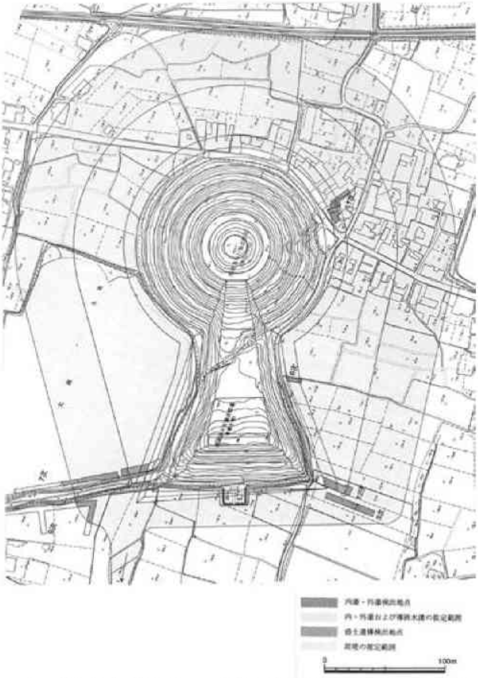

図１　箸墓古墳の復元（橿原考古学研究所『箸墓古墳周辺の調査』奈良県文化財調査報告書 第89集　2002年より改変）

なるのがこの箸墓古墳ということになります。考古学でわかっているのは、それまでいろいろなお墓がありますが、お墓という面から見ますと、ここには非常に大きな「画期」があるということです。

そうしますと、一体なぜ、どういう背景からこのような変化が発生したのかということがすぐ問題になるわけなんですけれども、実はこの問題は、戦後もう五十〜六十年間ずっと議論が続いてますし、いろんな研究者が興味を持ち、たくさんの研究がなされ、盛んに検討が行われていますが、まだ決着がついていません。たくさんの説明があります。その分、謎と言いますか、おもしろいというか、みんなが関心を持っている分野です。私も興味を持っております。この間には単なる墓の変化だけではなくて、何かもっと大きな変化があったんだというふうに多くの人は考えてはいますが、具体的にはわかっていないという状態です。

「変化」の状況について、もう少し詳しく見ていこうと思います。弥生時代の終わりぐらいの時期の墓と比べてみます。弥生時代にも大きい墓はあるんですね。例えば岡山県の楯築という墳墓、これちょっと変った形をしてまして、双方中円墳という言い方をされています。二つの出っ張りがついていて、真ん中が丸い形です。墳丘長が八十メートル前後に及ぶかなり大きな墓です。弥生時代の墳墓としてはかなり大きなものが、岡山県でつくられている。

島根県には、非常に奇妙な形の墓なんですけれども、糸巻きみたいな形をした墳墓があります。名前も

変ったものがついていまして、四隅突出型墳丘墓と呼んでおります。四つの隅が出っ張っているからということなんですけれども、島根県をはじめとして、日本海側に多いのが特徴です。楯築墓ほどではありませんが、これもなかなか大きい墳墓です。

それから、ちょっと前から話題になっているのですけれども、京都の赤坂今井墓という弥生時代の墳墓があります。京都と言っても京都市の方ではなくて、丹後ですね。日本海側で山地の中にあります。まわりに広い平野もないんです。これまた非常に大きな墳墓です。説明なしに見たら、古墳だろうと思うぐらい大きく立派な墓がつくられている。これは形は四角です。

こうやって見てゆくと、弥生時代の墳墓にも、結構大きなもののあることが分ります。もちろん、普通の人が葬られている墓ではなくて、ある程度のクラス、特に岡山の楯築墓とか丹後の赤坂今井墓は、その地域のトップクラスの人たちが葬られている墓ですが、弥生時代にはもう出現しています。弥生時代の後半にはかなり身分の差というのがはっきりしてきており、その中でもリーダーになる人はこういった特別な墓に入るという制度ができ上っているわけです。

しかし、一つ言えることは、墓の形がばらばらなんですね。日本海側では、糸巻きみたいな形をしている墓があるし、京都の北の方では四角い墓が流行するというふうに、墳丘の形に統一性が余りなくて、地域ごとの特徴が強いのです。

古墳時代になると、前方後円墳という統一的な形ができ上がり、日本の広い地域でこの形がつくられます。各種の特徴がまとめられ、南は鹿児島県から北は岩手県まで、ほぼ似たような形の墓がつくられ、とくにトップの人たちの墓がこの形に統一されることが一つの特色です。墳墓の形式に全国的な決まりごとができ、そして同じような規格でつくっていくということが一般的になるのです。

さらに大きな特徴は、弥生時代の墳墓と箸墓古墳とでは、全然大きさが違うことですね。楯築墓も非常に大きいのですけれども、この箸墓古墳はもうそれとは比較にならないほど巨大化しています。これも変化のキーワードの一つです。

大きいというのは土盛りの量が大きいということなのですけれども、たくさんの巨大な墓がつくられるというのも大きな変化です。御存じの仁徳陵古墳とか、応神陵古墳というのは、箸墓古墳よりさらに大きいんですよね。

それから、これは都出比呂志先生という有名な考古学者がつくられた図なんですが、単に大きい墓があるというだけではなくて、その中に順番と秩序があるということを示しています（図二）。一番左上のところに前方後円墳があり、そこに大きな前方後円墳が絵が示されています。日本で一番トップの人たちの墓が、一番の大きさでつくられていることになります。

ところが、それよりちょっと一回り小さいものもある。さらに一回り小さいものもある。かなり小さい

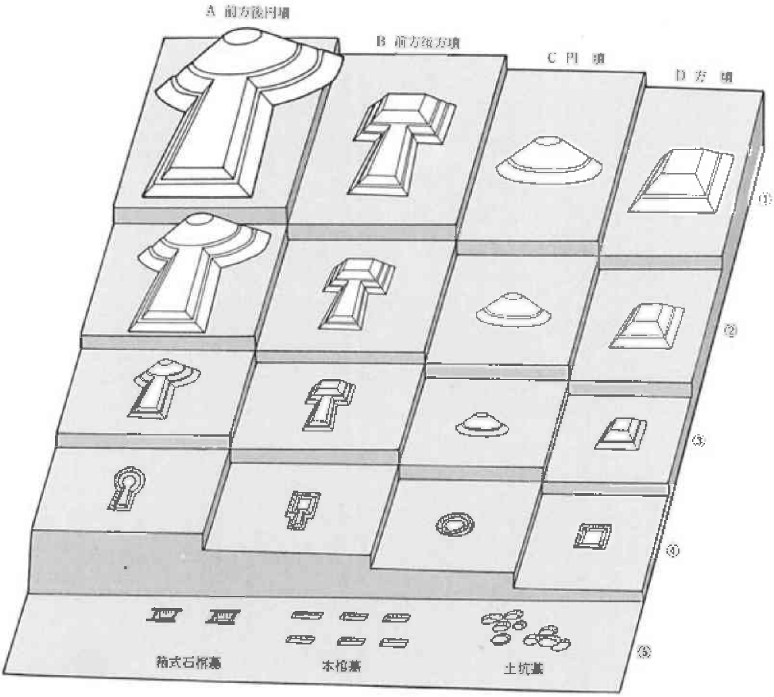

図２　古墳の形と規模による階層
（都出比呂志編『古墳時代の王と民衆』古代史復元６講談社 1989 年より）

ものもある。こういうふうに順番に大きさが変わってゆく。こういう状態について、ちょっとかたい言葉ですが、私たちは「階層性がある」という言い方をしています。順番にランクがあるということですね。墓にランクづけという、そういうものが出てくるというのも、古墳時代からの変化なんです。弥生時代は大きな墓はあるのですけれども、そういう順番に小さくなってゆくという傾向は、あまりはっきりしない。古墳時代になりますと、前方後円墳の一番大きなものとそれから小さなもの、もっと小さいもの、そういう差がどんどん激しくなってゆくのです。

大きさだけではなくて、形にもそういう秩序があります。前方後円墳だけではなくて、円墳とか方墳という単純な形のものもあって、それぞれ大きい、小さい、やっぱり階層性がある。大きな円墳もあれば小さな円墳もあるという、そういう順番が非常にはっきりしているというのも特徴です。

こういう秩序が出てくるということは、人間の社会そのものにも変化、階層性が出てきたと考えられます。トップの人たち、その次の人たちという順番がかなりはっきりしてきた。そのトップの人たちはもう格段に大きいというそういう特徴が出てきたのも古墳時代になります。

さらに、それが全国的に形が統一されているというところがミソでして、これは奈良県に、あるいは大阪もそうなんですけれども、いわゆる後の大和の王権とか、大和朝廷とか、そういう大和を中心にこのような仕組ができ上がっていったことを意味します。一番トップは奈良か大阪に墓をつくるという、そして地域にゆくとやっぱり小さくなっていくというのがはっきりしています。それまでは地域ごとに特色があって、岡山県にも大きなお墓があったりするわけなんですが、そういうことは薄れてしまう。

いろいろな要素を取り上げていくと、やっぱりこれはかなり大きな変化とみることができます。最後にあげました大和中心という特徴が一番はっきりしているのですけれども、その後、日本の歴史は近畿を中心に都がつくられ、天皇中心の社会がつくられていくわけですが、その始まりもここにあるのです。この画期における変化というのは、その後の時代の方向性を決定づけるような変化であったということがわか

るわけです。
こういう非常に大きな変化ですから、その背景に具体的に何があるのかということに関心が持たれるわけですが、ここからはちょっとわかっていないこと等を幾つか上げてゆきます。
まず一番は、前方後円墳というこの奇妙な形、これが一体どこからどのように出てきて、一体どんな意味を持っているのかということに関しましては、いろいろな意見はあるのですけれども、最終的な決着には至っていません。トップの人のお墓であり、一番大きなお墓がこの形になるわけですから、当時の何かシンボル的な意味があったはずなのですけれども、じゃあ具体的にどんな意味があったのか、これがよくわからないんですね。
最近中国へ行って、中国の漢のお墓というのを見てきたんですけど、皇帝の墓には、四角いものと、丸いものがあります。四角や円形の墳丘というのは、どこでもごく一般的な形ですね。日本の前方後円墳の特色は、突起物がついていることです。この突起のルーツに関しましては、非常におもしろい説明があります。丸い墓の回りを溝というか、堀で囲っているものがあるのですが、ここに橋をつけた墓が弥生時代に出てきます。橋と言っても、木でつくった橋を渡すわけではなくて、陸橋なんですけれども、その部分だけ掘り残し、堀をとめてしまって、渡って出入りができるような形態が出てきます。この陸橋が突起・前方部へと発達していったのではないかという考え方もされています。

さっきの四隅突出型墳丘墓という形も、同じような説明ができるんですね。四角いお墓があって、隅だけ掘り残して陸橋をつくって、お墓の中に入れるようにした。

人間のつくるものとか、生物の器官にもよくあることですが、最初は意味があって、あることに使うためにつくられていた形が、だんだん元の意味・役割を失って形式化してゆき、飾りとか装飾というか、そういうものになってしまう。そんな変化は、私たちの身の回りにもよくあります。もとは陸橋だったものが、その意味を失って、前方部の形に変わったのではないかというのも同じ考え方です。四隅突出型も、最初は橋として使ってたんだけれども、その意味を失って、この段階では橋という意味はあんまりなくて、出入りに使われた形跡はないのですね。単なる突起で、飾りに近い形になってしまっている。

もともとは陸橋だったのが、その意味を失い、しかも大型化して、でき上がったのが前方後円墳ではないかという説は有力です。ただ、これだけではまだ解決していません。

と申しますのは、まだ前方後円墳に至る間の変化が非常に大きいんですね。前方後円墳という形ではもう陸橋の面影はまったくなくて、全体が一つの形になってしまっています。

また、ほかにもいろいろな説がありまして、例えばこの形自体に何か意味があるんだと。ひっくり返すと土器の壺に似ているので、壺の形をかたどったのではないかという説明もあるんですけれども、私には余りそうは見えません。まず前方後円の形は上から見えたわけではないんですね、当時の人には。ですか

ら意識の上でそういう壺を想定したのではないかという説明もあります。他にも説はありまして、例えば、これは丸と四角が合体したものだという人もいます。円と方というのは、中国では天と地の象徴です。前方後円墳という形は円と方が合体してでき上がったもので、それで一つの世界を表現しているんだという説もありますけれども、どうでしょうかね。

方と言ってるんですが、実は前方部は単なる四角ではないんですね。箸墓古墳の形もそうなんですけれども、側面がカーブを描いて広がっています。むりに見れば四角なんですけれども、円と方という合体形にはちょっと見えません。

ともかく、当時の人は何かこの形に強い意味を見出して、そしてこれを一番トップの人から、ある程度の人たちまで広く採用、これをつくることに大変なエネルギーをかけていたのです。

古墳の形について、今、上から見た平面形だけを話してきたのですけれども、もう一つ特徴があります。この近所の方でしたら、五色塚古墳を多分ごらんになったことがあると思うんですけれども、そうであればすぐイメージがわくと思います。単に平面形だけが問題じゃないですね。

古墳の形というのは、横から見たときどうなっているかも問題です。つくられた当時には段になっていることが重要です。決して丸い山ではありません。一定以上の大きさの古墳はみなそうなんですけれども、段で墳丘を構成しています。私たちは「段築」と呼んでいるのですけれども、大型古墳では大体三段です

ね。これもランクによる違いがあって、ちょっとランクが落ちると二段になったり、段がないものとかいろいろあるんですが、段築で古墳をつくっているというのも大きな特徴です。

長い年月の間に、この段はだんだん崩れてしまって、今見ると、そんな形には見えない状態のものが多くあります。しかし本来の形では、大きな古墳というのは、段がつくられている。この段をどのようにつくっているかというと、土盛りによるのですが、斜面には石を並べておりまして、これを私たちは「葺石」と呼んでいます。

今、見える仁徳陵古墳などは、うっそうと木が生えてて、自然の山みたいに思えるんですけれども、あの姿はできたときのイメージとは全然違いまして、復元された五色塚古墳の姿が当時のありさまなんですね。ぱっと見たときには石で覆われた、石山みたいな状態です。

さらに、この段の平らなところには、埴輪が並んでおります。特に五色塚古墳では、びっしりと並んでいます。石で覆われ、埴輪がずらっと並んで、かなり人工的な山という姿ですね。木はもちろん一本も生えてません。完全に人がつくった構築物というイメージを持っていただいたらよいと思います。

こうした形状にも何か意味があるのですね。単なる山ではなくて、段をつくり、表面を石で覆って飾り立てることにたくさんのエネルギーを使う。よく、前方後円という形だけが問題になるんですけれども、そうじゃなくて、その他の要素もふくめて全体的な説明が要るんですね。私たちは古墳というと、山をつ

くろうとしたというふうに思いがちなんですけど、それよりも、石山をつくろうとしたのではないかと思うこともあります。何を意味するのかというのは、これまた意見がいろいろ分かれるのですけれども、そういう外観を強く意識した墓が出てくるのも、古墳時代の特徴です。

この大きな変化の後、大和が中心になり、大和に一番大きな古墳があって、全国にその影響を及ぼすことになります。これについては多くの人の意見が一致しておりますが、問題は、その前の段階ではどうだったのかというところがまた謎であります。というのは、大和には、今の箸墓古墳、それから、ちょっと前にも、最近報告書が出たホケノ山という墓があるのですけれども、その前の段階については、実は余り大きな墓が奈良でも大阪でも見つかってません。ですから、墓だけからいいますと、弥生時代の大和に大きな墓を生みだす下地があったとは見えないのです。

さらに研究者に衝撃を与えた発見というのがありました。箸墓古墳から出土しました特殊器台型埴輪と呼ばれるものがそれです。これは、埴輪の先祖になります。ちょっとだけ説明しておきますと、埴輪というと馬の埴輪とか人物埴輪とかを思い浮かべる方が多いかもしれませんが、埴輪の中心となるのは円筒の形をした埴輪なのですね。筒の形の埴輪がメインでして、埴輪を使ってる古墳でしたら、この円筒埴輪が主となります。人物とか馬の埴輪というのは後から出てくる形式です。

この円筒埴輪の古いタイプが、箸墓古墳にありました。一体この形はどこからきたのかということが、いろいろ議論になってたのですが、土器の器台からこの形ができてきたのだということが、研究の結果、判明しました。器台とは何かというと、もともとはこういう壺などを乗せる台なのですね。「台」と呼んでいるのはそのためです。この器台がどんどん大きくなってゆき、特殊という名前がついているように、用途が特殊化し、最後には古墳に並べるようになるという、そういう変化があったことがわかっております。

問題はそういう変化が起きたのが、大和ではないことです。そうした変化が起きたのは、吉備、岡山県だと。埴輪の御先祖が岡山にあるんだということがわかって、研究者に大きな衝撃を与えました。それまでは古墳というと、大和が中心だから、全部そのルーツは弥生時代の大和にあるのだろうと。それがだんだん変化してきて、大きな前方後円墳ができ上がっていったのだろうと考えられていたわけです。しかし、とくに最近は、葺石という要素もそうですが、弥生時代の大和の墓にはそういう要素がそろってない。むしろ他の地方にそういうものがあるということがわかってまいりました。弥生時代から古墳時代への変化というのは、大和にあった勢力というのがだんだん大きくなってきて、そして全国を支配するようになったんだというようなイメージだけでは説明が難しく、どうも地方からの色々な影響がある。大和の遺跡から地方の土器がたくさん出てるというのもそういうことなんですけれども、地方のいろんな勢力が集まっ

てきてつくられたのが、古墳のはじまりではないかという説明が有力になっています。ただ、具体的に地方がどのようにかかわってきたのか、どんなところが中心になったのか、人によっては岡山県の人たちが来てつくったんだという、極端な説もあるんですけれども、その辺に関してはまだ意見が分かれている状態でして、決着がついていません。

以上が、一般的な変化説明なのですけれども、最近ちょっと私が考えておりますとかいうことを、少しお話ししていきたいと思います。そもそも日本の古墳、前方後円という形は非常に特殊なのですけれども、他国の墳墓と比べてどんな特徴を持っているのかということをよく考えます。

偉い人のために、大きな墓をつくるという風習は、世界の各地にあります。一般には「王陵」と呼んでます。中国では歴代の皇帝の王陵があります。日本でも王陵は古墳時代以降もつくられる場合がありまして、御承知の方も多いかもしれませんけれども、明治天皇は桃山に大きな墳丘のお墓がありますよね。大正、昭和天皇は東京の多摩に、古墳を参考にしたようですけれども、大きな墓があります。朝鮮半島の三国時代~高麗時代にもありますし、非常に強い力を持った人たちが現れると大きな墓をつくるというのは、一般的な風習だというふうにとらえられますけれども、実はそれを見てゆくと、結構違いがあるんですね。

日本の古墳がどういう特徴を持っているのかということを見るときに、世界のほかのお墓ですね、ほかの王陵と比べるというのは非常に重要な研究視角だと思います。王陵中の王陵という点で、秦の始皇帝陵、

行かれた方も多いかもしれませんけれども、世界遺産に指定されている秦の始皇帝陵というのはどんなものなのかという話をさせていただきます（図三）。

高校・中学校の歴史の教科書にはよく出てくるのですけれども、日本の前方後円墳は大きいと、仁徳天皇陵の墳丘の部分の大きさは世界のどの王陵よりも大きいだろうということで、比較としてピラミッドと秦の始皇帝陵が出てきますが、ちょっとその説明は間違っているんですね。

秦の始皇帝陵の平面図を用意してあります。その真ん中にある四角い部分が墳丘です。結構大きな墳丘があります。墳丘の長さだけを比べると、それは仁徳陵古墳の方が大きいのですけれども、秦の始皇帝陵というのは、これだけがお墓というと、大間違いです。それは有名な兵馬俑坑の発見もふくめて明らかになってきたことです。

どういうことかと申しますと、中央に四角い墳丘があるんですけれども、調査とか探査の結果、わかってきたのですが、この墳丘の回りにいろんな設備があるんですね。図には内城、外城と書いてありますけれども、これを中心にして取り巻くような城壁があり、空間があります。これはもう宮殿と同じ形式ということです。本来の宮殿も皇帝のいる場所があって、その回りを内城、外城でくくって、皇帝に仕える人、政治に従事する役人、それぞれの建物が回りに並んでるという仕組みと同じです。

兵馬俑坑は、何でこんなに離れてるかというと、宮殿の回りを守る軍隊を表したものと考えられます。

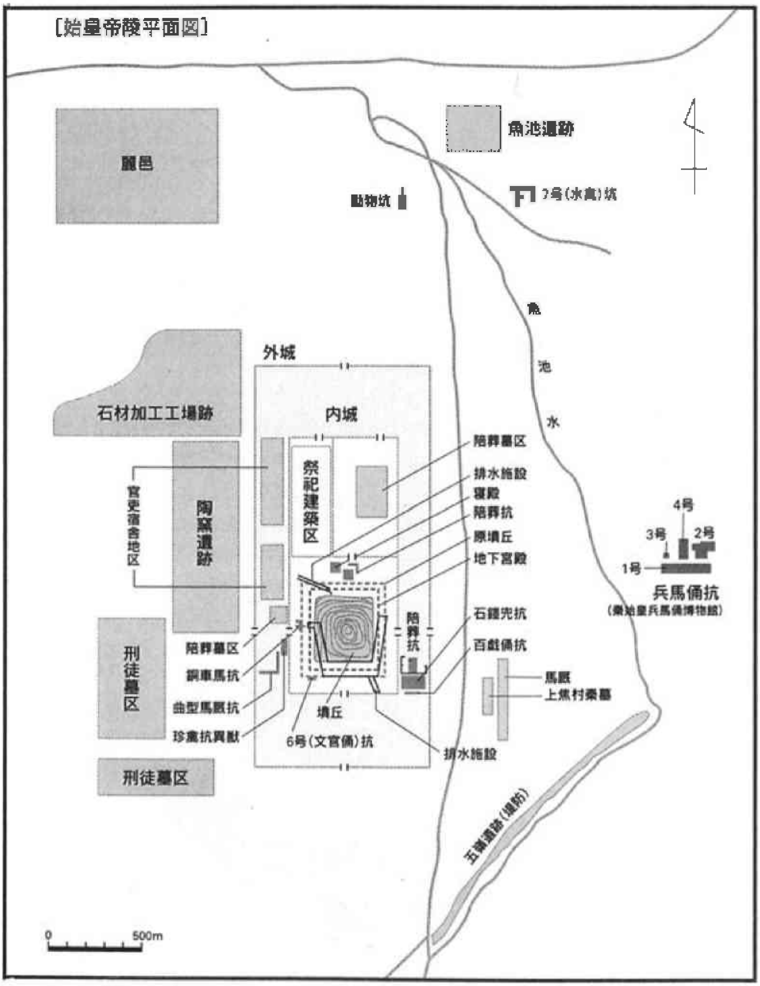

図３　秦始皇帝陵（稲畑耕一郎・鶴間和幸監修『始皇帝と彩色兵馬俑展』図録 2006 年より）

ですから、全部が王陵の空間でして、墳丘だけを仁徳陵古墳と比べてもしかたがないのですね。始皇帝は、死後も現世と同じような生活をしたいという願いをもっており、いわば死後の宮殿をつくられたのです。墳丘を中心に、生前と同じように、皇帝に食べ物をささ

げる人、着物を持っていく人、そういう人たちのいろんな設備が回りにありまして、さらにその回りを軍隊が守っている。

北の方では池の跡が見つかっており、これは庭園でしょうね。宮殿に伴う庭園などが北の方には広がっています。回りには墓をつくるため、墓を整備するための工場の跡なんかも見つかっておりまして、とんでもない規模の墓です。これだけ広い地域を一つの「墓」としているわけです。

さらに最近びっくりしましたのは、この墳丘本体は発掘はしていないのですけれども、中身がどうなっているのかということで、科学的な探査の方法で検討した結果が発表されています。有名な司馬遷の『史記』に記事があるのですけれども、中には水銀の川が流れてたとか、それから後からお墓を荒らす人が入ってきたら弓が自動的に射るんだとかいう、すごい設備があったと書かれています。あるいは人魚の油で灯をつけてるから、ずっと中は地上の世界と同じように明るかったなんていうことも書いてあって、本当なのかという感じもありました。しかし探査の結果によって、この墳丘の地下の三十メートルの深さのところに東西八十メートル、南北五十メートル、高さ十五メートルの空間があることがわかりました。何かかたい物でつくられ、しかも中が空洞であるということがわかったんですね。

八十メートル、五十メートルの空間って、今ではつくるのはそう難しくないと思うんですけれども、当時はそれをどうやって支えたかということが問題ですね。鉄筋コンクリートはありませんので、この空間

を支えるための壁と天井が必要なわけです。木では腐ってしまいますから、無理です。それから石を積んでこういう空間はできません。天井が支えられません。何かで支えなきゃいけないんですけれども、銅でつくられているとも言われています。この空間に宮殿をつくり、皇帝の居所とした墓であろうとも考えられます。

大変な「王陵」ですから、前方後円墳と比べてはいけないのですけれども、墓をつくることとの根本的な考え方の違いもあるのです。始皇帝は不死を願い、墓の中に入っても、生前と同じような生活をすることを想定したわけです。これは古代の中国の思想なんですけれども、亡くなった後もこの現世と同じような生活を送るというのがあの世の世界。あの世へ行っても、子孫がおまつりをしてくれて、自分を代々ずっと祭祀をしてくれることが何より重要なのです。

だから墓ではあるのですけれども、今の世界を基本的に向こうへも持っていこうという、そういう意識の強い墓が、始皇帝陵だけじゃなくて、もっと下のクラスのお墓、あるいは漢代のお墓でもそういう形式が続いています。墓の中というのは現世とつながっているんだと、そしてそれは祖先のいる空間で、それを子孫がおまつりしてくれるんだという来世観がお墓の特徴にもあらわれています。

日本の古墳はどうもそういう気配がないんですね。前方後円墳の回りでは、祖先をまつるための空間というのは、今のところ見つかってません。墓だけなんですね。しかも造った後は、造りっ放しというと言

い過ぎなんですけれども、祖先を何かお祭りをしたりという跡は、今のところはあまり多くは見つかっていません。少なくとも大規模におこなったという例はないですね。そういう傾向が弱いことも、日本の古墳の大きな特徴です。

さらに、前方後円墳の一番の中心は後円部でして、この真ん中に埋葬施設と呼ばれる死者をおさめる空間があります。この埋葬施設には一つの特徴があります。時代によってちょっと違うのですけれども、何と表現したらいいのかわかりませんが、呪術的な要素が大変強いというのが日本の古墳の埋葬施設の特色です。

たとえば私が調査に行った滋賀県の定納古墳群というところでは、長い木の棺を使って死者をおさめていました。身長よりもはるかに長い棺を使うのです。それに蓋をして埋めるというタイプの墓だったのですけれども、棺の中は全部まっ赤です。目にも鮮やかな赤の世界です。

奈良県の有名な藤ノ木古墳もそうですが、石棺の中も赤なのですね。あるいは奈良県の黒塚古墳という、三角縁神獣鏡がたくさん出た古墳の埋葬施設も赤の世界です。大変な量の赤色顔料を使っていまして、とくに、水銀朱という顔料がたくさん使われています。

こうした赤色顔料を使った具体的な理由も、本当のところはよくわかっていません。人によっては血の象徴だとか、あるいは、水銀の朱は防腐処置として入れたのではないかという人もいるのですけれども、

よくわかりません。ただこれも呪術的な性格を強く示しているとは思います。

もう一つ重要な特色としては、人を埋める際に密封しようという意識の強いことがあげられますね。箸墓古墳の後円部にもあると思われますが、石を積んでつくった竪穴式石室と呼ばれる埋葬施設が古い時期の古墳の特徴です。棺の回りをたくさんの石で囲んでいます。全部石で覆うような形で囲んでます。

何でそんな処置をしたのかというのも難しい問題なのですけれども、これには恐らく先ほどの埴輪とも共通する性格があるようです。埴輪も古墳の周りを取り囲むような形に用いられています。囲む、ふさいでしまうという意識が見えるというふうに考えられます。それは何のためかというと、基本的には外から何か悪いものが入ってこないようにする。私たちはこういう行為を、「辟邪（へきじゃ）」という言い方であらわします。邪を避けるということですね。悪霊とか、悪いものとか、死者を傷つけるような、そういうものが入ってくるのを払うような、防ぐような、そういう意識がこの日本の古墳の、特に古い段階の古墳には強いというように言われています。

先ほどの赤い顔料の使用もそうですが、やっぱり呪術的な特徴が強いというのが日本の古墳の大きな特色だと思います。中国の墓とは意識が違ってまして、生前の世界を持っていくのではなくて、もう死の世界へ入ると閉じ込めてしまってる。外から遮断するような、そういう非常に強い意識が働いています。

この古い段階の古墳のもう一つの面白い特徴として、北枕という法則もあります。日本全国全部そうと

いうわけではないのですが、特に奈良県を中心にして、遺骸の頭を北へ向けようという意識が強く働いていたことが分っています。埋め方に一つの思想と言いますか、呪術的なことが影響したと考えられています。

北枕とか、それから先ほどの段築、あるいは朱の赤い顔料については別の説明もあります。都出先生の説なんですけれども、やっぱり中国の影響ではないかという人もいるんですね。中国思想が埋葬の思想に影響を与えてるのではないかと説明されています。よくはわからないのですけれども、前方後円墳の出現のときには、宗教と言いますか、死生観念と言いますか、あの世への考え方とか、そういうところにも大きな変化があったということも重要な点です。

都出先生はまた、古墳時代に登場した社会の仕組みについて「前方後円墳体制」というふうに名づけられました。古墳時代にあらわれた前方後円墳の仕組み—トップが、明確であり、それから大きさの順に区別があり、さらに古墳の形にもこういう区別がある—こういった階層性と秩序がある社会、そしてそれがお墓にあらわれた社会のことを前方後円墳体制と呼んで特色づけています。大和を中心に、前方後円墳という墓のつくり方で全国的なこの支配の体制をつくったのがこの時期であると説明されたのですね。ただ、前方後円墳という要素の中には、そういう社会とか政治とかいう関係だけではなくて、呪術的な要素もありますし、何かよくわからない、いろいろな特徴もあります。それらの要素も先にみましたように、あち

こちの地域から寄せ集められてきた可能性もあるということで、実はまだまだよくわかっていないというところが本当です。

最後に、ちょっと感想じみたことを申します。学会とかでは言えないことなのですけれども、日本の古墳というのは墳丘があまりにも大きいと思っています。周囲に施設が伴わない分、やたらと墳丘が大きいというのが、他地域の王陵と比べて日本の古墳の最大の特徴ではないかと思います。

先ほど中国の皇帝の墓を見ましたが、墳丘も大きいのですけれど、一定の限度があるのです。朝鮮半島にも大型の古墳があるのですが、日本の古墳とは比較になりません。一番トップの人のお墓でも、日本の古墳から言うと中規模クラスから小規模クラスなんですね。

古墳時代の人たちは、この墳丘に一番のこだわりがあって、表面を大量の石で飾ったり、すごいエネルギーをかけてるんですね。それと比べて中の埋葬施設はアンバランスで、宝物的なものも多くは入ってません。鏡など当時の人にとっては財宝なのかもしれませんけれども、副葬品には余り力を入れず、墳丘に莫大なエネルギーをかけている。それがどういうふうに生まれてきたかというのは、ちょっとまだ余りはっきり結論はできてないんですけれども、私はこのあたりに非常に関心を持ってまして、やっぱりいろんな面から今後も検討を続けてゆきたいと思ってるんです。

つたない話ですけれども、ちょうど時間がまいりましたので、以上で終わらせていただきます。

（拍　手）

○司会　どうもありがとうございました。

それでは御質問があるようでございましたら、お受けさせていただきますので、どうぞ挙手していただけますでしょうか。

はい、ちょっとお待ちください。

○質問者A　この古墳に埋葬される方は、偉い方だと思うんですけれども、一般人は普通の土地に埋葬されてたわけですか。

○森下章司准教授　一般人というのは、本当の一番下のクラスについても、幾つかお墓が見つかっていますす。それは本当に穴だけです。穴がたくさん集まっていまして、そういうところに一緒に葬られている。副葬品は何もないという状況ですね（図二の下段参照）。

○質問者A　昔はそうだったんですけど、近年はみんな火葬になってるんですけど、いつ土葬から火葬に変わったんですか。

○森下章司准教授　火葬は、日本に初めて入ってきたのは奈良時代からですけれども、広くは普及しないのですね。最初は僧とかごく一部の人だけです。上層の人や都市以外で、本格的に火葬が普及してゆくのは明治以降で、もっと言えば昭和以降だそうですね。土葬は長い間、残っていたのですね。

○質問者Ａ　そんな新しいんですか。

○森下章司准教授　はい、新しいと思います。

○質問者Ｂ　ちょっと単純な質問なんですけれども、巨大な古墳が大和、奈良地方に大量に集中しているとか、あるいは権力者が大和、奈良地方にたくさん出て、そしてやがては大和政権につながっていくんだということは、中学校の教科書にもそんなふうに書いてあるんですけれども、例えば巨大な古墳をつくる上では、渡来人のやっぱり技術が、土木技術にしても、いろんな石積みの技術にしても絶対必要じゃなかったかなと思うんです。そうだとすれば、やはり便利な北九州であるとか、日本海側の出雲であるとか、そちらの方にもっと、奈良より、大和よりも大量の巨大な古墳群がいっぱいあってもしかるべきじゃないかなと思うんですけれども、なぜ巨大な古墳が大量にあるのは奈良か、あるいは権力者が出てくるのは奈良か、ちょっと単純な質問なんです。

○森下章司准教授　まず、なぜ奈良が中心になったのか。これは議論が分かれているところでして、今までは奈良にもともとそういう勢力がいたからだと説明されていました。しかし、そうではないんだということになってくると、なぜ奈良が選ばれたのかということになるんですけれども、奈良の独自性をのべる説があります。極端な説ですと、奈良の地に宗教的な意味があったんだという人もいるぐらいです。これも証拠はありません。

それ以外に、奈良というのは東の日本の世界とつながるからだという説明とか、いろいろあるんですけれども、どれも証拠があって言ってるわけではないんですね。だから、なぜ奈良が選ばれたかということに関しては、今、研究者の間でも一致していません。

その渡来の人たちとの関係から言いますと、奈良を中心に、外からの人たちも集まってくるんですね。箸墓古墳の時代はまだよくわからないのですけれども、もうちょっと後の時代、五世紀と呼ばれる時代になりますと、たくさんの渡来の人たちの跡が、兵庫県でもたくさん見つかっております。大阪にも集中しています。また九州の方でも、朝鮮半島とつながりのある遺跡が最近たくさん見つかっています。この古墳をつくる技術には、確かに高度な技術が必要なんですけれども、それがこの段階でも渡来人の力が必要だったかどうかというのは、ちょっとわかりません。土を盛るという、言ってみれば単純な作業ですので、ここまではひょっとすると伝統的な技術でもできたのかもしれませんね。よろしいでしょうか。

○司会　よろしゅうございますか。ほかにはございませんでしょうか。

ないようでございますので、これで本日の講座を終わらせていただきたいと思います。

もう一度、先生に拍手をお願いしたいと思います。

（拍　手）

○司会　どうもありがとうございました。